
ペナルティ4

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペナルティ4

【Nコード】

N0894B

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

ペナルティ第四弾。熱斗たちの未来は、ペナルティに託された・・。

Ⅱ第248話 薄気（第248話 はき）Ⅱ

ペナルティはなにか楽しくなかった。なぜだろうか。毎日の生活に追われ、学校に行ったあとは、勉強尽くし。世の中は、何も変わっていない。まるで、今までのペナルティたちの苦勞を水の泡のようにしてしまった李。しかし、その李も、最近では見かけなくなっていた。

ペナルティには、笑いが不足していた。いや、笑いなどというものは、そこら辺でテレビをつければやっている。

しかし、それを見ても、もうペナルティは笑えなかった。なぜだ。少なくとも、熱斗といたときのほうが凄く楽しかった。

もう一度、熱斗に会いたかった。しかし、もうそんなことはできない。

これからは、自分で歩んでいかなければならないのだ。

しかし、やはり、生活は楽しくない。このままだと、木偶の坊になりそうだ。

そんなとき、ある人物がペナルティのところに向かっていた。

その男も、この世の中から、笑いが消えたと思った。

しかし、男はペナルティにある提案を持ってきたのだ。

それは、忘れかけていたことだった。なぜそんなことを忘れたのか、自分にはさっぱりだった。

男は、言った。

「あなたはある真実をまだ知らない。」

その男の言葉を聴いた瞬間、ペナルティは思い出した。李だった。

ペナルティは現実の生活の流れに、李との記憶まで流されていたのだ。それも当然だろう。現実では勉強ばかりを要求される。ペナルティは古いことなど覚えてられるはずがない。

久しぶりに李に会ったペナルティだったが、李からあることを告げられることになる。

李は、ペナルティにこう言った。

「熱斗たちの未来が消えた。このままでは、人々の永遠の発展ができなくなる。」

それを聞いてペナルティはすべてを思い出した。新神が熱斗たちを排除しようとしていたことを。

それに気づいたときには、李は消えていた。

Ⅱ第249話 生活との戦いⅡ

しかし、ペナルティにはやらなければならないことが山ほどあった。しかも、ペナルティは不安だった。熱斗が倒されるほどの敵と戦えるかと。しかし、これは熱斗がどうやって倒されたか知らないからである。

そして、次の日。ペナルティは普通に学校に登校した。

しかし、学校はいつものように荒れていた。

ペナルティが途中から通い始めてからこうだった。しかし、ペナルティは今まで通った。

授業はぜんぜん進まなかった。まるで幼稚園のような状態だった。

ペナルティが自分の席に着くと、誰かが後ろからやってきた。ペナルティは、その人を見たとき、驚いた。

それはクラスで一番の問題児。川瀬だった。

「よう。ペナルティ」

川瀬はこう言った。

ペナルティはいやな予感がした。川瀬の仲間は、皆、川瀬にお金を巻き上げられたらしい。それを川瀬が何に使っているのかは分からないが、多分、ろくでもないことに使っているのだろう。

そんなことをおもっていると、川瀬は言った。

「ペナルティさ、お金貸してくれねー。」

やはりそうだった。ついに川瀬はペナルティまで触手を伸ばした。
「うーん・・・。」

ペナルティは考え込んだ。ここで断れば、その後どうなるかペナルティには想像ができた。だからといって、貸してしまえば、多分、それは戻ってこない。みんなこうやってお金を奪われたと聞いているからだ。

ペナルティは考え込んでいるだけだった。チャイムが鳴っているのに川瀬は、そこを立ち退かなかった。

「早くしろよ。」

だんだんと川瀬が怒り始めていた。

そしてついに川瀬は他のところに行ってしまった。そして、この瞬間から、川瀬のペナルティいじめが始まるのであった。

その次の日、ペナルティが朝、学校に來ると、机がとんでもないことになっていた。

Ⅱ 第250話 いじめⅡ

ペナルティの机は落書きされ、さらには、脚がほとんど曲がって使えない状況だった。

すぐに職員室に駆け込み、担任の吉本先生に言ったが、かえって来た言葉はとんでもない言葉だった。

「お前さ、なんか反感買うことやったんじゃないか」

それにペナルティはうなずいた。

「そうか、やつぱりな。確かにあいつらも悪いが、お前も悪い。だいたいお前はやさしすぎるんだよ。反抗しないと。」

この言葉にペナルティは、ある一種の憤りを感じた。

そして家に帰ると、部屋をめちやくちゃにした。

ペナルティの母親はその音に驚いた。ペナルティの母が二階に上がると部屋はだらしない状態になっていた。

そして、ペナルティの姿が消えていた。

ペナルティは、近くの団地の公園に来ていた。相変わらず、小学生はカードゲームに熱中している。ペナルティはそんな中、一人暗い思いになっていた。

“なぜ、先生はたすけてくれないんだろうか。もしも梅園先生だったら・・・”

ペナルティは梅園先生がうかんだ。そういえば、熱斗たちの世界は消えてしまった。しかし、ペナルティにはあの空間が一番だった。居心地が良かった。

いつの間にか、日が暮れていた。公園の電灯に明かりがつき、小学生はいつの間にか消えていた。

そこに一人の男が近寄ってきた。ペナルティが身構えた。

その男は李だった。その姿を確認するとペナルティはほっとした。李はこう言った。

「ペナルティ。熱斗たちを助けられないか。今からでも遅くはない。ペナルティもやつと気が張ってきたようだ。」

李の言葉にペナルティは心の中が突き動かされた。

「はい。なんだか、熱斗たちとすごしていたほうが楽しい。」

ペナルティはそう言った。それと共に、涙が一筋垂れた。

「そうか。つらかっただろう。」

李はペナルティをやさしく抱えた。

Ⅱ 第251話 新神との再選へⅡ

ペナルティと李は、新神と戦うためにひそかに熱斗たちの世界へ旅立った。

そこは、廃墟が乱立していた。とても人が居そうな雰囲気ではなかった。

その頃、新神もペナルティたちの動きを察知していた。しかし、新神は余裕だった。いまさら、元に戻すことなどできないと。

新神は、ちょうど、大プロジェクトが終わり一息つけた。そして、

ペナルティたちを迎えるためにペナルティたちを探し出しに旅立った。

さて、ペナルティは目の前の光景にまだ啞然としていた。そして、日が暮れようとしていた。

ペナルティたちはそこを動けなかった。夜、空を不気味なぐらい星が覆っていた。

李はテントを張り、あらかじめ用意していた品々をあけた。ペナルティが驚いた原因は、もしかするとこの巨大なリュックサクだったのかもしれない。

次の日、ペナルティが目覚めると、李は外で誰かと話していた。ペナルティが外へ出るとそこには、新神がいた。

「やあ、挑戦者よ。私は受け入れる。人間は挑戦をしない。しかし、もしも人間が挑戦することが出来れば、こうにはならなかっただろう。」

「いや違う！」

ペナルティは反論した。

「少しは、成長したみたいだな。ペナルティ。」

新神ははき捨てるように言った。

そして、新神は言った。

「さて、でははじめましょう。ペナルティにペナルティを課すつもりはない。ナビと自由にクロスフュージョンするがよい。」

「しかし、ここでは出来ないのでは。」

ペナルティは言った。

「では、なぜ他のところでは熱斗がクロスフュージョン出来たのだろうか。それは、このカードを仕込んでいたのだ。」

新神はある一枚のカードを見せた。それは少年たちが持っているようなかみ（ペーパー）で出来たものだった。

「これは紙だが、熱斗たちのPETにはあるものが仕込まれていたんだ。」

新神の言葉にペナルティは驚いた。

Ⅱ 第252話 正の影Ⅱ

「光正を知っているか。」

ペナルティは熱斗のおじいさんが疑人格プログラム、つまり、ネットナビを作ったということを熱斗から聞いた事があった。

「その光正プログラムはいくつかあるんだ。そのひとつは、熱斗のPETの中に隠されていた。それが、このカードと同じ働きをするものだ。」

ペナルティは種明かしに感心した。

「さて、やろうか。」

新神はそれがあるカードリーダーに通した。

「これでハンデイーはなくなったな。」

新神はそう言った。

「ペナルティ、クロスフュージョンしろ。」

李は命令口調で言った。そしてペナルティはクロスフュージョンした。

しかし、いつもとは違っていた。ペナルティのシンクロ率はあまりよくない。だから、まるでもう一人を背負っているような状態なのである。しかし、今は違った。凄く体が軽かった。

「どうやら準備は整ったようだな。」

新神はそういうとカードを出した。

どうやら、そのカードをカードリーダーに通すと、戦えると言ったのらしい。どこかのアニメでやっていたのとおんなじだ。

新神は、いろいろな攻撃カードを仕込んできた。しかし、結局のところ、ネットバトルとそんなに変わったものではない。ペナルティも、何回かだけネットバトル？をやったので、多少ついていける。しかし、能力に差があった。

「どうやら、ついていけないらしいな。」

新神は言った。そして、新神はある作戦を実行しようとしていた。

新神はあのアニメのきめ台詞的な発言をした。そして、新神はカードを裏返すと、そこに登場したのは、哲史だった。

「さあ、やってしまいなさい。」

いつの間にか、新神の持っているカードリーダーが、本に進化？していた。

さて、ペナルティはどうなってしまうのであろうか。

Ⅱ 第253話 過去を捨てて・・・Ⅱ

ペナルティは、哲史に困った。自分には攻撃できなかった。しかし、哲史は新たに習得した技を使ってくる。とても不公平だった。

「どうだ。もう哲史は昔の哲史ではない。今、裏の力、ウラケンを手に入れた哲史にかなう相手はいない。」

新神は微笑んだ。まるで悪魔だった。

ペナルティはこのままでいいのだろうかと思った。今まで、こんなことをやられてばかりだった。もしかすると、自分は弱いのかも知れない。

そういう感情がペナルティを包んでいた。しかし、ペナルティは我を忘れてはいなかった。

なにかいい方法は。

ペナルティの心の中はもう葛藤だらけだった。

しかし、ペナルティは決めた。

それは哲史を攻撃することだった。

そして、ペナルティは作戦を実行した。

今度は、ペナルティが有利になった。

これに、新神は困ってしまった。しかし、時は過ぎていくだけだった。

ついに哲史は勝負に負けてしまった。

新神の作戦負けだった。新神は、信じられなさそうな顔をした。

ペナルティは言った。

「たとえば、友達でも、時には厳しく、時にはやさしくすることが大事なんです。」

新神は、それを聞いて言った。

「わたしの負けだ。この世界を元に戻そう。」

そして、新神はあるチップを持ってきた。

「これは、私が保存しておいた人間たちのデータだ。これをPETに挿入すれば、データによって元に戻る。そして、これが解毒剤だ。」

ペナルティは早速、PETにチップを挿入した。そして、地球を光が包んだ。

熱斗は気がついた。

そこにはペナルティがいた。

「俺は……。」

熱斗は言った。

ペナルティは皆が戻ってくれたことにうれしかった。

そして、ペナルティたちに新たな課題が課せられた……。

Ⅱ 第254話 伝説が加速する！！ Ⅱ

熱斗たちはだんだんと新神と戦っていたことを思い出していた。そして、同時にペナルティが活躍したことも……。

ペナルティは貴船長官に呼ばれた。

「君の活躍を私も初めて知った。どうもありがとう。」

それにペナルティは照れた。

「さて、是非、首相が表彰したいと言っているのだが出席してくれるかね。」

そのことばにペナルティはうなずいた。

そして、次の日、ペナルティは首相のところへ行った。

「ありがとう。ペナルティ君。そして、すまないことをした。」

首相は会うなりこう言った。

そして、首相は続けた。

「今まで、過去から来た人間はしょうがないやつしかいないと思っていた。しかし、それは私の勘違いだった。」

「そうだよ。」

熱斗が言った。どこから入ってきたのか分からないが、そこに熱斗がいた。熱斗はこういった。

「前に、バレル隊佐という人が来て、共に戦ってくれたことがあるんだ。そして、ペナルティがまた、他の時空から現れた。こんなにみんながんばってくれているのに、なぜ時空法を作ったのか。俺には理解できない。」

首相は、時空法をなくすと宣言してくれた。そして、ついに元の世界に戻ることもなった。

ペナルティは祐一郎に聞いた。

「また、来てもいいですか。」

それに祐一郎はうなずいた。

ペナルティの心のなかの闇雲がすっきりとしていた。

ペナルティは元の世界に戻った。自分の部屋はぐちゃぐちゃだった。そしてペナルティはその部屋を直すと、勉強を始めた。高校受験は確実に迫っていた。ペナルティは、一生懸命に勉強をした。

その姿に、ペナルティの母も安心した。

次の日、ペナルティは学校へ行った。もう学校に行きたくなかったという気持ちはなかった。旅立つ前はそんな思いが自分を包んでいた。しかし、あの世界で気分転換できた。

もう何があっても怖くはなかった。ペナルティには相談相手が出た。向こうの世界にいる熱斗が・・・。

（後書き）

今までありがとうございました。ペナルティ5（多分、これで終わりだともいます。）があります。どうぞご覧になってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0894b/>

ペナルティ4

2010年10月11日05時38分発行